

国立体育大学（国際交流協定締結校・台湾）における柔道指導

濱田初幸*

1. はじめに

鹿屋体育大学と国際交流協定締結校にある国立体育大学から、台湾教育部との連携プロジェクト「原住民柔道選手合宿講習会」を開催するに当たり、柔道指導者派遣の要請を受けて、台湾にて実技指導と講義を実施した。

講習会には、指定を受けた原住民柔道選手に加え、国立体育大学柔道部員、台北近郊にある複数の強豪高校チーム、台湾ナショナルジュニア代表選手が参加した。

国立体育大学柔道部は、2013年ユニバーシアードに台湾代表として5名の代表選手を派遣するなど国内の強豪校と知られているが、シニアの国際大会や世界選手権レベルでのメダル獲得の実績はなく、五輪や世界で勝つためにはどうすればよいか、強化方法を模索している様相が窺えた。アーチェリーなど他競技では五輪メダルを獲得していることから、柔道競技の国際大会でのメダル獲得を照準に見据えた招聘でもあった。

(写真1) (写真2) (写真3) (写真4) (写真5) (写真6)



写真2 キャンパス内



写真3 学生寮



写真1 国立体育大学本部



写真4 陸上競技場

* 鹿屋体育大学 スポーツ・武道実践科学系



写真5 主体育館

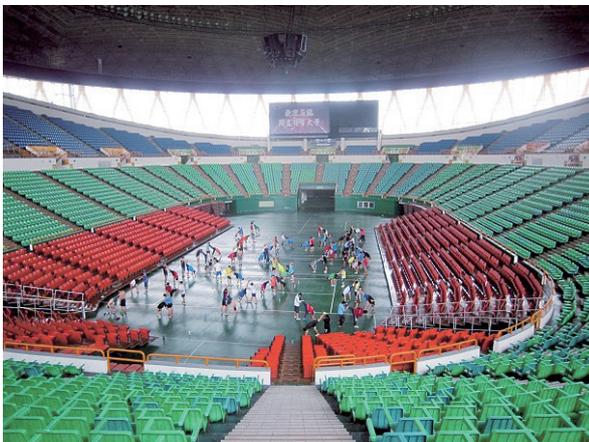


写真6 主体育館アリーナ

2. 指導内容

期間：2013年8月4日－8月9日

派遣先：国立体育大学（台湾）

目的：柔道に関する理論と実技指導

日程：表1

表1. 指導日程

月 日	内 容
8・4	台北国際ジュニア柔道大会視察
8・5	国立体育大学・原住民族選手を指導（固技の基本）
8・6	国立体育大学・台北高校選抜・原住民族選手等（立技を中心に）
8・7	講義：「世界の柔道から観えたものとは」
8・8	国立体育大学柔道隊・紀俊安監督とミーティング
8・9	帰国

台湾原住民とは台湾政府が定める先住民族の呼称である。参加した約40名の選手は、15歳から20歳までのカデ（15歳から17歳）やジュニア（20歳以下）世代の原住民族柔道選手が過半数を占めていた。参加者全体の技能はハイレベルに達していないとの判断から、基本技を中心に指導することにした。特に足技に関する基本技術で、刈足の指先を屈曲させる意義を強調し、「出足払」、「燕返」、「大内刈」、「小内刈」の基本的となる掛け方を説明した。また、相手と組み合う相対練習の他に、単独の練習方法でも技を上達させることが可能であることを説明し、単独動作による打ち込み練習法を示範して見せた。単独動作での反復練習の有効性と負荷の掛からない状態で理合いに叶った投技のフォーム作りが重要であり、スピード向上にも効果があることを伝えた。

「背負投」や「巴投」など難度の高い技は、デモンストレーションとして披露するに留まり、指導者らは、やや物足りなさを感じていたようだ。基本技を徹底して修得し、正しいフォームを構築すれば、高度な技も容易にマスターできると言い添えた。

固技においても同様で、基本技の説明に徹した。寝姿勢で相手と向かい合い、下方から返す方法を3通り説明し、自分の足を手の如く自由に操れる基本動作の重要性を説いたが、ここでも関節技や絞技の高度な技術を期待していた感が見られた。「脇絞」や「前海老」、「後海老」、「横海老」などの基本動作を中心に実践を想定しながら解説した。最後に単純な基本動作の反復練習が、最後まで諦めない「忍耐力の養成」にも繋がることから寝技を通して精神力の強化を図り、心技体を備えたより完成された選手を育成できることを説いた。

講義には国立体育大学の学生、原住民族選手約30名が聴講した。演題：「世界の柔道から観えたものとは」と題して、プロジェクターを用いて講義を行った。主な内容は、アトランタ五輪で担当コーチとして指導した田村亮子（現姓：谷）の決

勝戦での敗因，その後のシドニー五輪での金メダル獲得秘話や偉業を成し遂げた強さの要因に関して，体験談を交えて行った。また，国際化した柔道の実態に関して，特に欧州の現状についてデータを基に講義した。蔡櫻蘭教授に通訳として登壇して頂いたことから，3時間と長時間にも拘ら



写真7 講義聴講生と



写真8 技術指導



写真9 技術指導参加者と

ず，熱心に受講している様子が窺えた。

蔡教授との事前打ち合わせで，柔術の勃興，柔道創始の歴史，障害者柔道に関する解説は除外した方がいいと諭され，触れないことにした。双方の歴史観に配慮する必要があるからとの理由であった。国際交流において歴史認識や慣習，文化，政治，宗教上の国家間の相異が生じることは予期したことであり，蔡教授の要望を受け入れ，歴史に関する内容は割愛した。（写真7）（写真8）（写真9）

3. 今後の課題

台湾の柔道普及振興策は発展途上に有り，底辺層の拡大，ナショナルレベル層の競技力レベル向上が求められている。その中核を成す国立体育大学の柔道選手たちの卒業後の就職を受け入れる企業や，諸外国で見られる有段者や有望選手の警察官採用人事などは皆無とのことで，将来に不安を抱えながら練習に取り組んでいる環境下であり，改善しなければならない多くの課題が窺えた。

一方，近隣の高校には指導体制が整い本格的に強化を図っているチームがあり，在籍する選手の中には，身体的能力が高く将来性豊かで国際舞台での活躍が期待できる可能性を秘めた有望選手も見られた。今後，台湾選手が国際レベルで躍進するためには，高大一貫指導体制の強化システム構築，大学卒業後の受け入れ環境整備が鍵となるだろう。

武道交流についてミーティングを行った際に，紀俊安柔道部監督からこれまでに国際武道大学との交流実績があることから，本学との日台武道交流については課題事項として関係者と検討していかねばならないと述べた。

現状においては，練習環境は十分に整った状況ではなかったが，今夏に改装される陸上競技場メインスタジアム施設内に新柔道場が新設されることから，これまで以上に競技力向上の成果が求められていた。（写真10）



写真10 改装中の陸上競技メインスタジアム

4. まとめ

我が国の施策として掲げている高等教育機関における国際化の推進やグローバル化に対応できる人材養成, さらに本学の教育理念で謳われている国際性を備えたリーダー養成の視点からも, スポーツ・武道を通じた国際交流の推進は, 本学においても, より活発にしなければならない課題でもある。今回の国立体育大学への派遣を機会に, 双方の国際交流が一層促進され, 課題解決の一助として寄与できれば幸甚である。